

(3) 個別の評価に基づく構造化された指導法を用いた自閉症児支援

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 修士課程 ○下原 亮太

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 小林 信篤

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 重松 孝治

**【要 旨】**

TEACCHは、米国ノースカロライナ州で、自閉症児・者、その家族及び支援者に対して包括的な支援を行っている。そのTEACCHでは、支援をする上でアセスメントを非常に重要視している。我が国において、構造化された指導法を用いた実践研究は数多く行われているが、評価からどのようにして構造化された指導法を設定したのかという部分に焦点を当てたものはまだまだ少ない。

本研究では、フォーマル・アセスメント（以下PEP-3）とインフォーマル・アセスメント（以下観察）の両方に焦点を当て、支援を個別化していくプロセスを明らかにすることを目的とする。本発表では、スケジュールに焦点を当てて発表する。研究対象児は、知的障害児通園施設に通う1名の自閉症児である。PEP-3の結果から目標・課題を設定し、計画、実践、観察による再評価、再評価に基づく再構造化のプロセスを繰り返し行った。再評価のための記録は、研究者の作成した記録用紙を用い

た。対象児のスケジュール使用についての記録を分析し、対象児の活動から活動への移行の自立度の推移としてまとめた。

PEP-3の情報に基づいて、スケジュールを設定した。スケジュールをセッション毎の対象児の使用の様子を観察に基づいて再構造化を行い、個別化していった。その結果、対象児は活動から活動への移行が自立してできるようになった。

PEP-3は、支援を開始する上でのスタートラインを教えてくれ、客観的にA児の特性を知るために有効であった。観察は、スケジュール使用場面で行うことで、PEP-3だけでは把握しきれない個人の障害特性を把握するために有効であった。両方のアセスメントの情報が補完し合った結果、個人の障害特性の理解がより深まり、より個別化した支援を行うことができたと考える。また、評価に基づく支援であっても、支援の見直しや手直しが必要であった点から、構造化された指導法を行う上で、再評価や再構造化の必要性が再確認された。